

氏名	松浦百恵			
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博甲第236号			
学位授与の日付	2019年3月31日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
学位論文の題目	“是……的”構文の意味と論理 —現代中国語の焦点の意味の諸相—			
論文審査委員	主査	神奈川大学	准教授	加藤宏紀
	副査	神奈川大学	教授	彭国躍
	副査	神奈川大学	教授	鈴木慶夏
	副査	神奈川大学	名誉教授	松村文芳
	副査	神田外語大学	准教授	布川雅英
	副査	麗澤大学	准教授	温琳

【論文内容の要旨】

松浦百恵氏から提出の博士学位論文『“是……的”構文の意味と論理 —現代中国語の焦点の意味の諸相—』について、まず「(1) 研究の目的」を述べ、第二に「(2) 論文の全体の構成」を提示し、最後に「(3) 各章の内容」を説明する。

(1) 研究の目的

近年の現代中国語の“是……的”構文に関する研究は焦点理論の成果を取り入れ意味的、語用的面において発展を遂げ、“是”の焦点機能は広く認められるようになった。しかし、“是……的”構文をより深く理解するには、この構文がいかにして形成されるかという深い意味的な裏付けを解明することによって、より明確になると言える。この論文ではこの点に注目し、その記述をより深く考察、発展させることにより現代中国語の“是……的”構文の成立過程とこれまで見過ごされてきた各種の時態成分や様相成分との共起現象を体系的に解明することを目的としている。

(2) 論文の全体の構成

まず第1章「“是……的”構文の先行研究と研究方法」では、まず先行研究を「1.1 “是”に関する研究」と「1.2 “的”に関する研究」に分けて紹介した後、「1.3 研究方法」について説明した。第2章「“是……的”構文の演算成立過程と論理分析」は「2.1 各成立過程の理論的背景」を説明した後、「2.2 焦点化“是……的”構文の成立過程」において各演算過程を論理式によって詳述し、「2.3 各演算の全体の論理式」でまとめ、「2.4 “是……的”構文の『連鎖関係』の重要性を述べた。第3章の「焦点の意味の諸相における意味操作と論理分析」では「3.1 “是……的”構文における焦点」を明らかにした上で、「3.2 『位置置換文』における焦点」を論述した。

第4章「時態成分“了”が共起する場合の意味と論理分析」においては「4.1 時態とは」を明確にし、「4.2 時態成分“了”に関する考察」を行い、「4.3 “是……的”構文における“了”

の論理分析」を詳述した。第5章「時態成分“着”が共起する場合の意味と論理分析」では「5.1 時態成分“着”に関する考察」を行い、「5.2 “是……的”構文における“着”の論理分析」を詳述した。第6章「時態成分“过”が共起する場合の意味と論理分析」では「6.1 時態成分“过”に関する考察」を行い、「“是……的”構文における時態成分“过”の論理分析」を詳述した。第7章「“是……的”構文における『様相』と『時態』の意味と論理分析」では「7.1 様相論理とは何か」を説明し、「7.2 様相成分と時態の関係」を詳細に論じ、「7.3 時態と関わらない成分についての考察」を行っている。

(3) 各章の内容

第1章では「1.1 “是”に関する研究」の節を三つの先行研究（朱德熙 1982, 李臨定 1986, 張和友 2012）の記述として分けて紹介した後、「1.1.4 本論文の捉え方」を提示している。ついで「1.2 “的”に関する研究」の節においては十篇の先行研究の内容を1.2.1 から1.2.7の七項に分けてまとめ、「1.2.8 本論文の捉え方」を提示している。そして「1.3 研究方法」では、「1.3.1 命題論理」, 「1.3.2 述語論理」, 「1.3.3 命題と可能世界」と「1.3.4 本論文における論理式」の四項に分けてこの論文で採用する形式意味論の枠組みとその表記法を提示している。

第2章の「“是……的”構文の演算成立過程と論理分析」は本論文の理論的中核となる説明部分である。まず「2.1 各成立過程の理論的背景」の節を「2.1.1 第一過程『格役割演算』」, 「2.1.2 第二過程『時間点演算』」, 「2.1.3 第三過程『様相演算』」と「2.1.4 焦点演算」の項に分けて明らかにし、さらに「2.2 焦点化“是……的”構文の成立過程」の節では三つの文を「2.2.1 第一過程『格役割演算』の論理式による分析」, 「2.2.2 第二過程『時間点演算』の論理式による分析」, 「2.2.3 第三過程『様相演算』の論理式による分析」と「2.2.4 第四過程『焦点演算』の論理式による分析」の各項で演算過程ごとに詳述している。「2.2.5 各演算の成立過程」では前四項で展開した分析対象の各文が「構成性原理」に基づいて成立する過程を図示して説明した。前節で分析した三文は「2.3 各演算の全体の論理式」の節でまとめられそれぞれ「2.3.1 “我是昨天进的城。”の論理式」, 「2.3.2 “小王是第一个跳下去的。”の論理式」, 「2.3.3 “王大夫是用中草药治好关节炎的。”の論理式」と三項に分けて提示している。「2.4 “是……的”構文の『連鎖関係』」の節では前節で提示した三つの論理式において「連鎖関係」が成立していることを強調した。

第3章の「焦点の意味の諸相における意味操作と論理分析」においては「3.1 “是……的”構文における焦点」と「3.2 『位置置換文』における焦点」の二節に分け、前節はさらに3.1.1 から3.1.6の六項で現代中国語についての「焦点」に関する先行研究を紹介し、その考察を通じ、「3.1.7 本論文の捉え方」と「3.1.8 “是……的”構文における『断定焦点』とは何か」の二項でこの論文における焦点に関する立場を明らかにし、次項の「3.1.9 『断定焦点』による考察」において実例を用いて分析した。後節は「3.2.1 位置置換文とは」, 「3.2.2 位置置換文の特徴」, 「3.2.3 本論文の捉え方」の三項においてこの論文で考察対象とする「位置置換文」を確定し、「3.2.4 『情報焦点』とは何か」, 「3.2.5 焦点の定義」の二項で焦点に関する議論を展開し、「3.2.6 『位置置換焦点』の意味操作と論理分析」ではさらに焦点成分の種類（主語、状況語、受け手主語、前置詞句、主語と前置詞句など）八つの小項に分けて論述している。

第4章から第6章は“是……的”構文が時態成分と共起する現象を論じている。このため、第4章の「時態成分“了”が共起する場合の意味と論理分析」ではまず「4.1 時態とは」において二項に分けて陳平 1988 と龔千炎 1995 の時態に関する立場を詳しく紹介した後、「4.1.3 本論文の時態の捉え方」を提示した。続いて「4.2 時態成分“了”に関する考察」では“了”に関する先行

研究を五篇紹介し、「4.3 “是……的”構文における“了”の論理分析」の節において“是……的”構文に“了”が共起する三つの例文を三項に分け、それぞれの成立過程を明らかにした。

第5章の「時態成分“着”が共起する場合の意味と論理分析」はまず「5.1 時態成分“着”に関する考察」において、“着”に関する先行研究を五篇紹介し、続いて「5.2 “是……的”構文における“着”の論理分析」では、「5.2.1 『時態+時制』の“在”と共起する“着”の論理分析」と「5.2.2 『時態+時制』の“在”と共起しない“着”の論理分析」の二項に分けて、前項は一例、後項は二例を取り上げそれぞれの成立過程を明らかにした。

第6章の「時態成分“過”が共起する場合の意味と論理分析」は前二章と同様の手法により、「6.1 時態成分“過”に関する考察」では“過”に関する先行研究を四篇説明した後に、「6.2 “是……的”構文における時態成分“過”の論理分析」の節において“是……的”構文に“了”が共起する三つの例文ごとに三項に分け、それぞれの成立過程を明らかにした。

第7章の「“是……的”構文における「様相」と「時態」の意味と論理分析」は主に副詞や助動詞によって示される様相成分と共起する“是……的”構文における、様相成分の意味とそれが表す時態の関係の解明を試みている。「7.1 様相論理とは何か」の節では様相論理を紹介し、「7.2 様相成分と時態の関係」の節においては様相成分が関わる「未然時態」,「単純時態」,「已然時態・単純時態」,「単純時態・未然時態」,「已然時態・単純時態・未然時態」の五類型の時態を明らかにし、最後の節では「7.3 時態と関わらない様相成分についての考察」を行った。

【論文審査の結果の要旨】

松浦百恵氏の提出された本論文に対して実施した博士論文口頭試問委員会における審査委員各位の見解、評価及び当日行われた議論を総合して次に論文審査の結果を述べる。

第一に先行研究で採られている記述文法の枠組みにとらわれず、現代中国語の“是……的”構文が4段階の演算過程によって成立することを明らかにしたことは松浦百恵氏独自の観点であり、従来になかった新しいアイデアの提出である。

第二に研究方法として形式意味論の立場から命題論理と述語論理に基づく論理式表示法を採用したことは、厳格な構成性原理に基づく意味の記述という本論文の目的に合致していると言える。

第三に論理式における命題間の「連鎖関係」の重要性を明らかにしたことである。

第四に“是……的”構文の“是”が表す焦点が[+突出性]と[+排他性]の性質を持つことを明らかにしたことである。

第五に“是……的”構文の“是”の焦点に関する考察を通じて得られた知見が「位置置換文」という別の文法現象についての有効な分析手段として使えることを実証したことである。

第六に従来の“是……的”構文の研究では論じられてこなかった各種の時態成分との共起現象について体系的に説明できることを明らかにしたことである。

第七に“是……的”構文における様相成分との共起現象の説明については体系性にまだ疑問が残るとの指摘を受けたが積極的な取り組みは評価できる。

第八に松浦百恵氏のこの論文の大きな功績はそれまで記述文法や対照言語学の枠組みで扱われることの多かった現代中国語の“是……的”構文の研究を形式意味論の視点から深く考察したことである。その考察は先行研究に範を求めることはできず独自に理論を作り上げる必要があった。その理論の中心は厳格な構成性原理に基づく「現代中国語の“是……的”構文の演算成立過程」とそ

の根拠としての「論理式の連鎖関係」である。

最後に各審査委員から今後の課題として、(1)例文番号や図・表の記法、(2)先行研究や用例のより効果的な提示、(3)誤字・脱字を減らす努力の3点について改善の余地があるとの指摘を受けたことを付記する。

以上、松浦百恵氏の博士学位請求論文を詳細に審査し、博士学位論文口頭試問委員会における各審査委員の意見、評価を尊重し、また学位論文公聴会における松浦百恵氏の明確な研究発表と率直、活発な議論を踏まえて本論文の内容を精査した結果、松浦百恵氏のこの論文が博士（文学）の学位を受けるにふさわしいと認定した。